大杉谷国有林からの手紙

29通目～森林植生の回復を目指して！～

平成16年度の業務研究箇所（平成29年5月撮影）

「蟄虫啓戸（すごもりむしとをひらく」、土中で冬眠をしていた虫たちも、暖かい春の日差しの下に出はじめる頃となりました。私も、寒さにすくんだ体を少しずつ動かさないとと思います。

さて、今回の手紙では、大杉谷国有林におけるシカ被害対策の最終目標である森林植生の回復に向けた取組について、ご紹介します。

ニホンジカの食害により衰退した森林植生を回復するための取組については、以前、この手紙でもご紹介しましたが、平成16年度の業務研究からスタートしています。この研究調査は、食害により裸地化した林地に防鹿柵を設置した区域と設置しない区域を設けて、防鹿柵の有無による植生の変化をモニタリングするものです。

しかしながら、この調査は、スタート直後に平成16年台風21号により大台林道の橋が決壊し、その後、8年にわたり不通になるなど、大杉谷の厳しい洗礼を受けました。このように森林植生の回復に向けた取組は、苦難の道を歩むことになりました。

その後、近畿中国森林管理局では、平成20年度から5年間、シカによる森林被害対策の検討を目的に自然再生推進モデル事業を実施し、平成24年度に「大杉谷国有林における森林被害対策指針」を策定しました。

27年度の意見交換会（27年8月19日）

これを受け、三重森林管理署では、平成25年度から指針に基づき、シカの食害により裸地化してしまった未立木地に、ブナ、ミズナラ、ヒノキの植栽を始めました。長い間、森林植生が無かったことから、一部表土の流出も始まっていたことから、丸太筋工を行い、土砂を安定させてからの植栽となりました。また、シカによる植栽木が被害を受けないよう、急傾斜地に金網の防鹿柵を設置するなど、多くの労力をかけての作業となりました。

これにより、植栽時期が秋になってしまったことから、植栽後、直ぐに寒風や乾燥などの厳しい環境の中に置かれました。この結果、翌年の春には、多くの植栽木が枯れるなどの厳しい現実に直面しました。

28年度の意見交換会（28年4月25日）

このため、平成27年度から毎年、専門家や県、市町、森林組合など多くの皆さんと現地で意見交換会を行い、次のような作業内容の改善を行っています。

①植栽木の乾燥、寒風害対策として、マルチング資材として、藁より丈夫で施工しやすいコモを採用。現地で調達できるシダや小石によるマルチングも検討。
②作業地の厳しい環境に適用させるため、多様な樹種の地域性苗木を使用。（29年度は19樹種1,185本を植栽）
③高標高による寒風害や乾燥害に対応するため、秋植えから春植えに変更し、活着率の向上と活着後の成長を促進させる。
④表土流出対策として、丸太筋工に比べ、施工が容易で現地の地形や崩壊地の形状に応じたきめ細かな設置が可能な法面植栽柵を試験的に採用。
⑤防鹿柵の材質については、金網は強度面では優れているものの、重いので施工面で難があることから、防鹿柵の内側の間仕切りにはネットタイプを採用し、強度を維持しながら施工性を高めた。

29年度の意見交換会（29年5月11日）

これらの結果を踏まえ、平成30年度は、2年間の捕獲により推定生息密度の低下がみられる重点捕獲区域の未立木地において、防鹿柵の設置と植栽を始めます。

具体的には、表土が比較的安定しているところに、周囲長５０ｍの防鹿柵（パッチディフェンス）を金網で10箇所、ネットで33箇所、点状に配置し、その中に、地域性苗木を植栽することとしています。

なお、植栽に当たっては、根株などでシカの食害から守られていた稚樹をできるだけ活かすこととしています。

いずれにしても、厳しい環境の中で森林植生の回復を図っていくことから、これからも多くの課題がでてくると思いますが、多くの皆さんのご理解とご協力のもと、頑張って取り組んでいきますので、今後とも、よろしくお願いします。

根株に守られた稚樹

（発行：三重森林管理署　尾鷲森林事務所　地域統括森林官）